

[研究論文]

## 「徳富蘆花『竹崎順子』

——明治の一女性の生き方——」

布川純子

神奈川県工科大学非常勤講師

TOKUTOMI ROKA“TAKEZAKI JUNKO”

——One life of the Meiji woman——

Junko FUKAWA

**Abstract**

“Takezaki Junko” was published in 1923. This book is a biography written about Takezaki Junko. Tokutomi Roka wrote it. Junko is my mother's sister. Roka loved the Junko as a mother's heart. Junko want writing their curriculum vitae on the verge of dying and prayed. 18 years later, Roka was finally completed.

I think I should wrote in the world worked as the principal of a girls ' school in one woman's way of life, this work is very much re-evaluate after becoming a widow, Meiji era, serve her husband at Kumamoto.

Keywords ; TOKUTOMI ROKA, TOKUTOMI KENJIROU, TAKEZAKI JUNKO, TAKEZAKI SADO, TAKEZAKI RITUJIROU, YAJIMA KAJIKO, Meijijidai

**1、はじめに****(1) 『新春』以後の蘆花**

『竹崎順子』(注①)は、大正12(1923)年4月21日、福永書店から刊行された伝記。竹崎順子は、母久子のすぐ上の姉であり、蘆花にとりこの伯母は「心の母」だった。

蘆花は大正7(1918)年4月『新春』を発表後(注②)、翌年1月25日から9年3月8日までの約1年2か月、夫妻で世界旅行に出た。当時世界は大正7年11月1日に第一次大戦が停戦し平穏を迎えたばかりだった。その旅は次のようであった。横浜を出発、インド洋廻

りで3月13日ポートサイトに上陸、3月30日にエルサレムに入り、6月16日まで聖地周辺を来訪。その後地中海を西に進み、アレクサンドリア、クレタに寄港上陸。7月12日にイタリアに入り、ナポリ、ローマ、ミラノなどに滞在。後パリ、スイスと廻り、10月17日にドイツに入る。敗戦後のドイツを見ることは目的の一つであったが、食事も不自由な状態のため、11月6日にベルギーからパリに戻り、イギリスに渡る。ここで新年を迎え、1月19日にアメリカに向かう。1月28日にニューヨークに上陸。南回りで大陸を横断し、2月20日にサンフランシスコを出港し、3月8

日横浜着。同日粕谷（注③）にもどった。

この旅行は復活祭前（1918年は4月20日が復活祭当日）にエルサレム入り（注④）をすることが第一の目的だった。その理由は、新生なった自分たち夫婦のために（注⑤）、ぜひ復活祭を聖地で迎えたかったからだと想像される。この大旅行の旅行記は『日本から日本へ』と題し、大正10（1921）年3月8日、金尾文淵堂から刊行された。

その後、大きな仕事はしばらくせず、夫妻で国内を旅行することが多かった。なかでも大正11年1月から3月の旅行は、妻愛子の兄原田良八（注⑥）の健康が思わしくないというので、朝鮮郡山に見舞いに行くことが主目的（注⑦）の旅だった。見舞い後、早々に九州にたち戻った蘆花夫妻は、蘆花生存中最後の訪問となった故郷熊本で、数回の公開講演を行っている。その一つが、伯母竹崎順子が晩年大きな功績を遺した熊本女学校（講演当時は大江高等女学校（注⑧））における講演（注⑨）である。先年伯母順子に託されていたことが、その思い出の地を訪問したことで、促されたと考えてよいだろう。

伯母に託されていたこととは、次のことである。明治38（1905）年3月、伯母順子が重病に陥った頃、蘆花は『黒潮』の第2部に行き詰まり止む無く中絶し、兄蘇峰（猪一郎）に「告別の辞」をつきつけ、絶縁状態に入っていた時だった（注⑩）。その鬱屈した気持ちを晴らすため、蘆花は一人で九州桜島を目指して旅に出た。桜島に滞在中、伯母順子の危篤電報を、東京の自宅で留守を守る妻愛子より受け取った。直ちに伯母のもとに赴き、臨終間際の伯母と対面し「わたしの履歴はああた書いて――」（全集15巻『竹崎順子』539頁、同様内容が18巻『富士』265頁）と言われた。その後、小康状態が続いたので、蘆花は迎えの車で女学校近くの姉（注⑪）の家に出かけた。ところがその束の間に、伯母は天に召されてしまった。最期を看取らなかったことを蘆花はおおいに悔いた。徹夜をしてま

とめた順子の略歴を、蘆花自身が熊本女学校葬で読み上げた。その後も「伯母の詳伝を書く為に」（同『富士』281頁）熊本にしばらく滞在し、色々材料を集めた。しかし、それからの18年間は、蘆花自身精神的につらい時が多く、「母の胎内から十字架を負ふて生れた彼は、順子の遺囑を果す可き機会に中々到達しなかつた」（同『竹崎順子』555頁）ため、そのままになっていた。それが晩年の旅行で、伯母が心血を注いだ女学校を再び訪問したことを契機に、積年の思いを実現しようとしたのだろう。

さて、後述する順子の生涯は、江戸時代末の肥後に生まれ、夫のもとで良妻賢母として過ごした半生と、未亡人になってからキリスト教徒となり女学校の寮母・校長として才能を発揮した半生だった。そしてこの無名の女性の生涯こそ、蘆花の理想とする「無欲で高潔」な生き方に価するものであったといえるだろう（注⑫）。ところが、作品としての評価はまったくなされていない。今回はこれまでほとんど顧みられてこなかった伝記『竹崎順子』に、蘆花が『新春』で表明した「Scape Goatとしての在り方を甘受し、世のすべての人々に神の福音を伝えていくような仕事をしたい」とした決意（注⑬）が、どのような形で表現されているかを見ていきたい。

## （2）『竹崎順子』のこれまでの評価

中野好夫氏は『蘆花徳富健次郎』（注⑭）で、『竹崎順子』について「教育家伝ではない。人間の伝記」（331頁）であり、「あくまでも正攻法の伝記」（336頁）でその魅力は「一に主人公竹崎順子と、書き手健次郎との深い愛情のかかわりにあったように思える」（336頁）と記している。しかし蘆花の作品の中では「異例の著」（336頁）といえるため、「従来の蘆花伝、蘆花論にあつて、特にこの作を採り上げたものは、ほとんどない」（336頁）とも記している。そして前田河広一郎を例にとり、『蘆花伝』（注⑮）は2頁だが作品的評価は皆

無に等しく、『蘆花の芸術』（注⑩）では1行で片づけていると指摘している。

しかし中野氏はこうした評価も一理あるとしている。その理由として「いわゆる出来栄というよりも、むしろこの著に注いだ健次郎自身の愛情にかかるものが、はるかに大きい」（337頁）ことを挙げている。さらに蘆花がこの作品で書こうとしたものが「単に竹崎順子個人の伝記だけに止まらなかった。詳説すぎるとさえ思えるほど、実家矢島家、婚家竹崎家などの家系をたどるはもとより、幕末維新時にかけての肥後学党の由来まで丹念に追尋した上で、その背景の下、おのずからにして竹崎順子なる<sup>まぐ</sup>掬すべき女性、八十一年の生涯を浮かび上がらせているわけである。が、それだけに、これら両家やその周辺に関して、多少の予備的知識でもある読者ならしらず、いきなり本書にとりつく平均読者にとっては、むしろ末梢的といっても過言でないほど、煩雑な小事実の羅列に終わっている部分が多く、かえって興を殺されるおそれすらある。」（337頁）と述べ、あまりに枝葉末節の部分に対する記述が多いことを残念がっている。だが中野氏個人としては「傑作」とはいわないが、「きわめて好感のもてる著作」（337頁）であるとし、「健次郎自身の自己投影——つまり、彼が懐抱していた日本女性への理想像とでもいうか、それを彼はこの伯母の中に見出していたのであり、（中略）めずらしくヒガミのない、また憎しみもない、全篇深い親愛で貫かれている」（338頁）と評価した。

中野氏の評するように、葬儀のために略歴をまとめている時「伯母が出て、公人が中々書けぬ」（同『富士』272頁）と蘆花は苦心した。大恩人であるこの伯母には格別、深い敬愛の念を蘆花は抱いていたことが、裏付けられる。特に『黒い眼と茶色の目』で描かれた蘆花自身と山本久栄との恋愛騒動で、その思いがより強まったのである。当時、若い二人の恋愛は周囲の反対にあい（注⑪）破局、傷心から蘆花は同志社を出奔して九州を放浪し

ていた。自棄になっていた蘆花を親戚のものがみつけ、順子のもとに伴ってきた時、順子は「『何の、好か、好か』と<sup>しよげき</sup>悄気切った甥を慰め励ました」（同『竹崎順子』211頁）。このように慈愛あふれる順子の庇護があったからこそ、その後の蘆花の活躍があるといえる。

こうした慈愛あふれる女性の理想像をどのように表したのか、蘆花の文章からその生涯を見ていきたい。

## 2、伝記『竹崎順子』

（以下引用文と頁は、特に記さない限り全集版15巻『竹崎順子』による。なお便宜上、『竹崎順子』書中の章表記は、論者が漢数字を算用数字に直して表記している。）

### （1）構成

伝記本文は全28章。

順子の誕生前から81歳で亡くなるまでをほぼ編年体形式で、以下のようにまとめている。

① 順子誕生（第1章）

② 誕生から結婚まで（第2章）

—10歳～16歳

③ 結婚から夫の死まで（第3～11章）

—16歳～53歳

④ 未亡人から熊本女学校舎監・校長へ

（第14～23章）—53歳～80歳

⑤ 病床～死まで（第24～27章）—81歳

⑥ 順子没後『竹崎順子』完成までの18年間のこと（第28章）

本文の構成分量からみても、16歳で竹崎律次郎と結婚してから80歳で熊本女学校校長を引退するまでのことが、最も多く語られているのがわかる。

なお、本文中には故人書簡や日記、周辺人物の証言文章も多く織り込まれている。さらに付録として竹崎順子の歌135首を収録。巻頭口絵に肥後略図、竹崎茶堂（律次郎）、竹崎順子のそれぞれの写真、短冊3枚をおく。挿絵として、ゆかりの地や家の写真など14点（注⑫）も挿入している。また、中野氏の指

摘にあるように、順子の生涯に関わる熊本の諸事情、例えば肥後藩から熊本県近代化、横井小楠とその門下についての歴史的事象などが詳細に書かれている。

## （２）伝記本文から見る順子の生涯

### ①順子誕生前（第１章）

#### 【両親のこと】

矢嶋家は代々郷土の家柄で、父忠左衛門直明は当時郡代の下で地方役人を務めていた。武芸に秀で、身長も高く剛健な男性で「正直な、常識の豊かな、而して情愛の細かな人」（19頁）で、早くに熊本に遊学し、漢文を学び、和歌も好んだ。

母鶴子は、惣庄屋三村和兵衛の長女として、読み書きを好み、可愛がられて成長したが、矢嶋家に嫁いだ後は、「忙しいときは田畑にも出で、蚕を飼ひ、機を織り、裁縫をしたり、麻を績み、糸を紡ぎ、まめに働」く良い妻、良い嫁として評判だった（16頁）。

### ②誕生から結婚まで（第２章）

#### 【誕生】

順子は、父矢嶋直明 32 歳、母鶴子 28 歳の文政 8（1825）年 10 月 25 日（注⑩）に、肥後上益城郡津森に生まれた。二男七女の三女である。兄弟姉妹は次の通りである。順子の 6 歳年上の長女次女は双子で、にほ（子）、もと（子）と名付けられた。その 2 年目に長男源助（後、直方）が生まれた。その翌年に男子五次郎が誕生したが夭折。翌年に三女順子が誕生した。4 年後四女久子（蘆花の母）、それから 2 年後に五女つせ子、その 3 年後に六女かつ子（後、楫子）、さらに 3 年後に七女さだ子が誕生した。

#### 【幼少時】

幼少時、父直明が多忙で来客も多い家だったため、子供の多い矢嶋家では子育ては儉約と合理的な育て方をよしとした。母鶴子は家事の合間に百人一首を書いて子供たちに与え、それを使って字を学ばせた。嫡子の源助は熊本に遊学したが、帰省中は妹たちに論語や孟

子を教えた。衣服はすべて鶴子が手作りして着せていた。

### ③結婚から夫の死まで（第３章～11 章）

#### 【結婚】

天保 11（1840）年、木下家から竹崎家に養子に入っていた惣庄屋竹崎律次郎と結婚。順子は 16 歳、律次郎は 28 歳で再婚であった。当初、順子の両親はこの結婚話に難色を示した。婿候補竹崎律次郎は、家柄格式は同等であり、母鶴子の兄三村章太郎と親しかつたので本人に問題はなかった。けれども順子の両親からすれば、順子がまだ若いこと、その上、母鶴子は幼い妹たちをよく面倒見る片腕的存在とし順子を頼りにしていたこと、父親は気に入りの娘を手放したくないことなどから、即時に賛成は出来なかったのである。しかし、先方は熱心だった。父母はようやく娘を嫁に出す決心をした。そこで当の順子に意向を尋ねてみたところ、順子は見合いすらせず結婚を承諾した。両親から嫁に行けと言われた時「はい」と即答したと、晩年、順子は孫娘に語っている。「与えられた材料に苦情を言わぬ名匠」（38 頁）のようであり、「全く順子のやうにすべてに順ひ、すべてを愛し、而してすべてを生かす女」（38 頁）はいなかった。

#### 【子供】

天保 12 年（1841）11 月、順子が 17 歳の時、女兒を産んだ。「波仁」と名付けたが夭折。弘化 3（1846）年、順子 22 歳の時、女兒節子を産んだ。

#### 【破産から別居生活】

結婚後、順子は夫を敬愛し、「素直に快活な新婦」（38 頁）は竹崎家の人々すべてに愛され、幸福な新婚生活を送る。しかし、姑の死や実子を産後すぐに亡くし夫婦 2 人となった時、夫律次郎が「富をつくる」（40 頁）ことを計画した。そして「米が豊富な田舎の豪家が多く」（40 頁）する酒造事業を始めた。

天保 13（1842）年、もともと派手好きで山っ気のあった律次郎は、米相場にも手を染めた。だが、まもなく米が暴落してとうとう「

伊倉一と誇つて居た名家竹崎家の大屋敷、一丁四面の酒倉、田地、家財一切」（41頁）が人手に渡ってしまった。18歳の順子は、自身の持ち物、婚礼衣装もすべて手放した。「二三枚の着更へと鏡一面、風呂敷包にして」（同）本人は「これだけが私の荷物」（同）と涼しい顔をしていたが、さすがに「債権者も気の毒がつた」（同）そうだ。

気丈な妻に対し、投機に失敗した夫は行方不明になる。途方にくれた順子は姉の三村にほ子（注②）に相談する。両親のもとに帰ることを進める姉の忠告に逆らい、再び順子は伊倉に戻り「夫が破産し行方不明になったからとて、おいそれと生家に帰る気にはなれません。此上は如何してなりとも夫の帰りを待とう」（41頁）と決め、「何時とも知れぬ夫の帰りを」（同）待っていた。実家の両親、兄妹たちが順子夫婦を心配していたところ、偶然兄源助（後、直方）が「在方検分に歩いて居」（同）て、彷徨う律次郎と遭遇した。結局、律次郎は阿蘇の縁者のもとで今後の再興を図ることとし、順子はしばらく中山の竹崎の実家で預かることになった。この時の体験を順子は女学校の卒業生で実業家に嫁ぐ娘にこう語っている。「実業家の妻は、夫を信じ、まさかの時は素裸になる覚期ば、かねがねして居らねばなりまつせんばい」（同）。

雌伏中の律次郎は、「無念でたまらず」（47頁）、大阪に出て再び相場で一旗挙げようと考えたこともあった。しかし、相談にいった惣庄屋矢野甚兵衛に止められ、むしろ学問好きな甚兵衛から私塾を開くことを勧められた。もともと学識のあった律次郎はその勧めに乗り、阿蘇高森に小さな塾を開いた。その後順子の兄直方（源助）の強力な誘いによって、律次郎は直方と同じ横井小楠門下に入った。さらに甚兵衛は自身が布田に転任するにあたり、律次郎にも布田に移住して、そこで私塾を開くことを勧めた。布田は、俵山の山腹にある小さな山里の地で、会所が村の一番高い処にあった。律次郎はさらにそこから1

段上がったところに小さな掘立小屋を建てた。

天保15（1843）年、20歳になった順子は、2年の別居を経て、再びこの布田の地で夫婦共に暮らすこととなった。この2年は、早くに両親のもとを離れた順子にとって姉妹たちとの親しみも増し、むしろ「天恵」（51頁）となった時だった。

横井門下となった律次郎は熱心な学徒であった。それを陰でささえたのが妻順子である。観音堂の隣に塾を開き、子供たちが多く集まってきた。しかし日々の生活を支えるにはそれは少なすぎた。夫妻は粟飯を食べ、畑仕事をし、麩や蒟蒻、豆腐を作り売った。この時の生活を「わたしは、いつも主人がただ世間一般の営利商人で終ることを恐れて居つたが、突然あゝいふ不幸な境遇へ陥つて、その為に心を磨き、又世の中の為に盡す支度が出来るかと思ふと、只嬉しくて、身体の苦勞などは覚えもせず、毎日楽しんで働きました」（58頁）と、後年姪に語っている。

弘化2（1845）年、竹崎家先代の子供である新次郎も、律次郎の勧めで横井門下に入門し、律次郎の補佐として、塾を助けるようになった。律次郎は薬用広東人参の栽培や、蠟燭の原料となる櫨<sup>はぜ</sup>の木の植樹など、新しいことも手掛けた。そうした中で新次郎の母寿賀子が順子夫婦と同居する。もともと養母と不仲の律次郎との間で、順子は初めて嫁姑問題に遭遇する。しかし順子は「誠と愛を以て尽」し（63頁）、姑とも次第に親しい間柄となった。

### 【両親の死】

嘉永6（1853）年5月、順子の母鶴子が中風のため56歳で永眠。生涯は「充実」し「9人の子女を生み、8人の子女を育て上げ、処女とし妻とし母として賦与された『女』を能ふ限り生かし」たのだった（84頁）。

安政2（1855）年6月、妻が逝ってから2年後、父忠左衛門も62歳で永眠。30余年の役人生活の在職中の死は公葬として営まれた。

### 【横嶋新地時代】

万延元（1860）年夏、律次郎は実兄木下初



次郎の依頼で玉名郡横嶋新地の監督をすることになり、家族で移住。そのため、布田の地所、開墾、家屋敷、家塾などを、弟新次郎夫婦に譲った。律次郎の失敗により、竹崎家の家督を一切無くしたことを心苦しく思っていた順子にとって、この時の「身代譲り」（98頁）は責任を幾分か果たした思いであった。

文久元（1861）年、横嶋に移住してからも律次郎は持前の「機転と胆」（100頁）で、田畑を安く買い40町（注②）ほどになった。大勢の男女を使い小作の家族が移住し「律次郎順子を中心として、横嶋の新植民地王国」が誕生した。その中でも順子夫婦は先頭にたって働いた。多忙な毎日であったが、時には順子が三味線を弾き、律次郎が琴や笛を吹いて楽しむ時を持った。

文久3（1863）年、長女節子が19歳となり庄屋新野尾家の嗣子熊太（後、吉勝）24歳と結婚。熊太は嫡子ながら竹崎家の養子となる。

慶応元（1865）年、孫元彦が誕生。

慶応3（1867）年大政奉還。明治維新を迎える。横井小楠も維新政府の参与となった。しかし、翌明治2（1868）年1月5日、京都木屋町の自宅に帰る途中で、横井小楠は襲われ最期を遂げた（享年61歳）。残された小楠門下の中で重鎮の順子の兄矢嶋直方は東京に上ったが、肥後に残っていた夫竹崎律次郎（当時59歳）と義弟徳富萬熊（後、一敬。妹久子の夫。蘆花の父親。当時49歳）は、明治3（1870）年5月、熊本藩知事細川護久の下、熊本に出て藩政改革の先頭にたって働いた。

明治3（1870）年10月、蘭法病院を開設。翌4年にオランダ人マンスフェルを招聘し、医学校を開校した（注②）。また、同年8月にはアメリカ人ゼエンス大尉を招聘し、熊本洋学校を開校した（注③④）。改革は目まぐるしく進められた。しかし次第に竹崎と徳富が対立した。周囲の心配をよそに、結局10歳年長の竹崎が健康上の理由で官職を辞した（注⑤）。

#### 【日新堂塾時代】

明治5（1872）年、律次郎と順子は、郊外の本山村に屋敷を求め、家塾日新堂を開いた（注⑥）。また殖産興業の一環として、茶の栽培製茶を地元民にやらせた。この時から律次郎は号を白川から茶堂と名のるようになった。

律次郎は「急務は人を作ると云ふが第一だ。人が出来ぬと、大義を四海に布く事も何も得ならぬ。自分が志は正に此に在り。」（133頁）と生徒を前に思いを語った。また律次郎に劣らず、順子も「先天的教育家」（135頁）だった。前地横嶋新地でも「忙わしき農業の傍にさへ懇ろに下女下男を教へ、鄭寧親切に小作人の小供等を教育」（135頁）してきたが今回も県下から集まってきた生徒たちに対し、「順子は母となり友となり、竹崎氏を補<sup>たす</sup>けて親しく之を薰陶」（135頁）し、常に生徒に気を配った。特に内塾の生徒には「綻び、洗濯、さては書物、はきものまで細かに注意し、貧生のために人知れず己が着物をぬぎて<sup>あわせ</sup>袷<sup>あはせ</sup>を造り、綿入れを<sup>ととの</sup>調へ」（136頁）たこと、また食事にも注意し、原料を吟味し、滋養のあるものを食べさせた。それは、「主人初め来客、書生、下女、下男に到るまで」（136頁）すべてに対してであった。さらに幼年生の食事の際には、忙しくとも必ず食堂に行き、子供たちの食欲体調を確認した。

明治7（1874）年2月、順子夫婦は門下生4名を連れて東京へ旅行に行った。東京が初めての律次郎は、「教育と勸業」（138頁）に最も注目し、新しい教材や農業用具などを買い求めた（注⑦）。一方順子は、離婚後心機一転教職を学び、小学校に奉職していた妹楯子（かつ子改め）（注⑧）と再会した。帰郷後、日新堂は生徒が200名にも上った。この年医学校は廃止となる。

明治8（1875）年熊本洋学校、第1回卒業生を出す。ゼエンスは「自国の文化のすべてを日本に伝」（145頁）えるには、その「根底と信ずる耶蘇を伝」（145頁）えないことは、「所謂櫃を与えて璧をとどむる心苦しき」（145頁）を感じ、ゼエンス自身が信仰するキリスト

教を熱心に学生に与えた（注㉔）。

明治9（1867）年1月29日、洋学校でゼエンスより耶蘇信仰の教えをうけた若者35人（蘆花の兄猪一郎（蘇峰）や横井小楠嫡子時雄も参加していた）が、花岡山で誓文に署名する事件が起きた（注㉕）。7月洋学校は第2回卒業生を出したが、9月ゼエンスの任期満了と同時に洋学校が廃止となった。花岡山事件は順子夫婦にも衝撃を与えた。特に病気がちだった律次郎は、将来を期待していた青年たちの謀反に失望した。さらに官公立の教育機関が開校したことで、日新堂もとうとう閉じることとを決意した。夫妻は惜しまれつつ、高野辺田の隠宅に移住。10月24日、神風連の乱（注㉖）が起きる。

#### 【未亡人となる】

明治10（1877）年5月26日、竹崎茶堂（律次郎）が66歳で永眠。53歳の順子は38年間寄り添った夫を亡くし、未亡人となる。寂しさの中にも、「私は仕合せ者ですたい」（169頁）とそれまでの人生を思うのだった。

そしてその後の熊本女学校の「二十八年の大成は」は「娘としての十六年、妻と三十八年の幸福な愛の生涯を根とし」（169頁）で、出発したのである。

#### ④熊本女学校舎監から校長時代

##### （第14章～23章）

##### 受洗

明治20年1月妹つせ子（横井小楠の後妻で未亡人）が中風になる（注㉗）。孫土平が友人の時計を無断で質に入れたことで、中学校を退学させられた。このことで苦悩した順子は、「耶蘇教の薫陶を施す外はない」（202頁）と当時健次郎が在学していた同志社に土平を入学させた（注㉘）。さらに孫の元彦がアメリカで肺病のため病死（享年23歳）。あいつぐ不幸に襲われた順子は、「神にも仏にも人にも諂ふ事を賤し」み（208頁）、「夫茶堂に対する愛は、わが全を挙げての愛」であって、「耶蘇教に見かへることは、取りも直さず二夫に見ゆる」ことであって、「死よ

りつらい事」（同）と思ってきた。だがこの時「愕然と覚め」（209頁）「神の前に平伏し」（同）「自ら正しとした高慢の罪」（同）を神に詫びた。そして、10月、娘節子と共に海老名弾正らの立ち会いのもと、O.H.ギュリキによって洗礼を受けた（注㉙）。63歳だった。

こうして、新しい信仰を得た順子はこれまで耶蘇教を強く拒んできたことを、信仰の先達（ゼエンス、順子の妹たち等）（注㉚）に対し、律義に詫びた。12月には、失恋の挙句に同志社を出奔し、九州で彷徨う甥健次郎を「『何の、好か、好か』」と「慰め励まし」た（211頁）（本稿1の(2)参照）。

#### 【熊本女学会】

明治20（1887）年9月、一時下火となっていた熊本の耶蘇教も、洋学校第1回卒業の海老名弾正の熊本来住によって、勢いをとりもどした。海老名は、花岡山でキリスト教に誓いをたて、後に熊本バンドと呼ばれた一人で、同志社で学んだ（注㉛）。同年蘆花の従兄、徳永規矩（注㉜）らがキリスト教主義の学校として創設した熊本英語学会は、翌21年9月に熊本英学校と改名し海老名弾正が初代校長に就任した。謹慎中の健次郎も「教授や事務を助け」（217頁）、英学校は「見る見る成長」（同）していった。

片や「熊本に是非女学校を興したい、耶蘇教主義の女学校を興したい」（214頁）と熱望していた順子の妹久子（蘆花の母親）の願いがかない（注㉝）、その卵といえる熊本女学会が明治20（1887）年5月23日、誕生した。

しかし、教場は点々と移動し、教師役も定着しなかった。ようやく「黒板一、テエブル二、腰掛二」（217頁）の簡単な設えで、生徒が12、3名程度となった時、女生徒の世話をする年配の者がみあたらず苦慮していた。そこに登場したのが、64歳の順子である。

60年の間には「母とし祖母とし女一代の生活体験を十分に有」（218頁）ち、「さまざまな人々に触れ、青少年学生の世話」（同）の経験もあり、「正しく明るく愛する天資を、

儒教道德で練り上げて」(同)きた順子ほど、この任に適した人はいなかった。

### 【熊本女学校舎監時代】

しだいに生徒も増え、英学校の教師や卒業生が手助けするようになる。学校名義にしようとするが、「私立の、殊に耶蘇教臭味の学校」(219頁)は疎まれ認可がおりず、結局熊本英学校附属女学校となった。明治22(1889)年5月、熊本大江村に初めて女学校校舎が建てられた。「新校舎は、2階が畳敷の寄宿舎で、下が板敷の教場」(224頁)、「玄関の突当の八畳敷の一室が応接間で、且つ順子の室」(同)というつくりで、「女学校長は海老名、順子は舎監」(同)となった。11月2日、私立熊本女学校の正式認可が下り、看板も新たに掲げられた。

明治23(1890)年1月23日、大磯で新島襄が病死(享年48歳)。2月猪一郎(蘇峰)が東京で「国民新聞」を発刊する。10月海老名弾正が組合教会伝道会社社長就任のため、京都に転任。順子にとっては痛手であったが、後任の柏木義円(注③⑨)が英学校兼任校長として就任した。また教師も、同志社や英学校関係がその任にあたってくれた。

明治25(1892)年1月28日、孫の土平が肺病のため病死(享年24歳)。6月女学校第1回卒業生5名を出した。

明治26(1893)年7月女学校第2回卒業生4名を出す。儒教主義の尚綱しょうこう女学校が開校されるが、熊本女学校は「おとなしく然も堅実な生長」(255頁)を続けた。それは学校というより「家塾、家塾よりも寧ろ家庭」(同)だ。「夫婦の大倫を第一義に推す順子にとって家は何より大切」(同)なものだった。

明治27(1895)年、順子70歳。神戸に住む妹つせ子の見舞いのため、女学校の春休みを利用して旅に出た。それを聞いた東京の妹達(久子、楯子)からも是非上京するように促してきたので、東京まで足を延し、久しぶりに多くの親族と再会した。5月姉三村にほ子が永眠(享年75歳)。7月女学校第3回卒業生

6名を出す。日清戦争が起る。「正真正銘の忠君愛国者」(262頁)の順子は、「ちつとしては居られ」(同)なかった。12月妹横井つせ子が永眠(享年64歳)。

明治28(1895)年英学校兼任校長の蔵原これひろ惟郭(注④⑩)は女学校の経営改革をするために、71歳の順子に引退を迫った。「老の命をうち込んでの女学校」(271頁)を容易く手放すつもりもなく「生来の素直に年の功と、新信仰に入って以来の修養の功を積んで、和やかなものに包まれて居」たが、いざとなればドツしりとした大地其ものゝような、金剛不動」(272頁)の順子に対し、35歳の蔵原は怒鳴り散らすばかり。おとなしく叱られている順子もあまりの無礼には「あゝたは、老人ば何てち思うちそんな失礼な言ば仰有るか？」(273頁)と逆に蔵原を叱った。しかし、順子は「争う可きに争い、譲る時は譲るを知る人」(同)だった。そこで、女学校を出て高野辺田に戻った。だが、この後、女学校は順子につく生徒も多く、学校は二分されてしまった。結局順子は呼び戻され、蔵原は女学校から手を引き、代わりに福田令寿(注④⑪)が校長に就任した。孫菊子が病死(享年17歳)。

明治29(1896)年、熊本英学校の後を継いだ九州私学校が開校となり、姉妹校の女学校の存続も危うくなった、しかし「女学校は死なさぬ」(280頁)の順子の一言で、継続のため周囲が献身的に努力した。

### 【校長時代】

明治30(1897)年1月、熊本女学校がようやく独立認可され、73歳の順子が校長に就任した。

順子は校長となってもあいかわらず学校の応接間で生活をし、生徒とともに食堂で同じものを食した。そして、生徒には「女として生活する用意の為に来学して居ること」(284頁)を忘れないように教えた。その一例として、順子の日課の一つに「女生徒が無心に散らし捨てる紙屑を拾うてあるく事」があった。

明治37(1904)年3月、第13回卒業生を出



す。校長として 80 歳の順子の最後の卒業式であった。日露戦争が始まる。

#### ⑤ 病床に臥し亡くなるまで（第 24～27 章）

順子は、昨年夏に咯血して以来一進一退を繰り返してきた。明治 38(1905)年 3 月順子の病床には「生き残った同胞や数多い甥姪の大方は見舞に来たり、告別に来たり」（535 頁）した。しかし、在京の妹久子とは 10 年前に別れたきりであった。再会を望むが、久子も 77 歳の高齢で無理だった。せめて息子の健次郎（蘆花）はやってこないかと、順子はひたすら祈った。その祈りが通じたのか偶然桜島を旅行中の蘆花に、伯母重体の電報が届いたことはすでに述べた（本稿 1 の(1)参照）。

3 月 7 日、臨終の際、讃美歌を歌い泣いている者たちを慰め、呼びかけにも「ようよう眼を開きて『はい』と答えられ、息は次第に遠くなり、眠るように」（541 頁）、午後 3 時半「安らかに最期の息を引き取」った（同）。

3 月 9 日、日露戦争の「奉天、包囲の中に落つ」という号外が熊本市街を飛び交っていた。まさにその日に、牧師、生花、校友会からの「愛は永久に墮つることなし」「謙遜を着よ」「我を信ずる者は死ぬるとも活くべし」「汝等憂うる勿れ、神を信じ、また我を信ずべし」（548 頁）と記された旗<sup>りゅう</sup>4 旒を先導に、白布の上にさらに黒の布で覆われた御柩、柩の傍らに、喪主、近親、教え子、職員、その他の送り人の行列が、校門から順子の自宅まで厳かに続いた。この行列を見た市中の人々は、「何將軍の戦死かと驚いて見、それが軍人ならぬ一婦人の葬式であるのに眼を見はり」「此婦人が如何なる戦を戦い、而して如何なる凱旋の葬式であるかを知る者は、もとより多くは」（548 頁）なかった。

#### ⑥ 順子没後『竹崎順子』完成までの 18 年間のこと（第 28 章）

私立熊本女学校は、高等女学校令によって、大正 10(1921)年、大江高等女学校と改称。順子の命日 3 月 7 日が女学校の記念日とされ、順子の追悼会、墓参がなされている。順子の

墓は故律次郎の墓に並んで置かれた。健次郎は妻愛子を伴い、大正 2(1913)年秋、墓参。その折、以前に愛子が植えた木犀の花が佳い香をはなっていた（注⑫）。この後 18 年間かかってようやく『竹崎順子』を完成させたことは前述した（本稿 1 の(1)参照）。

#### 3、姉妹たちの人生

『竹崎順子』では、順子の姉妹たちについても多くの叙述がある。順子を理想の女性とみる蘆花は、実母や伯母、叔母の生き方を順子の生き方と比べて、著している。

長女にはは、次女もととの双子で、早くに地元の有力者の三村家（母親の生家）に嫁ぐ。

次女もと子は最初の夫とは死別し、藤島又八と再婚し、夫より先に亡くなる。

四女久子は、竹崎律次郎と同様横井門下の先鋭の徳富一敬の妻となる。実母鶴子の病氣見舞いに来た娘久子に対し、母は「おまへが子供の時から気任せで、頭が高くて、<sup>つつしみ</sup>謹慎が足らぬのが心配で」（72 頁）観音様に祈ったと言ったほど、勝気な娘であった。徳富家に嫁いってから 4 人の女兒を産むが、嫡子となる男子がなかなか授からなかった。その上、眼病から失明の危機が迫り、危うく離婚となるころだった。しかし長男猪一郎（蘇峰）が誕生したため、その地位は以後安泰となった。この 6 年後次男健次郎（蘆花）が誕生する。

五女つせ子は 26 歳の時、横井小楠（当時 48 歳）の後妻に入る。部屋住まいが長かった小楠には、実母や機織りの娘がそのまま妾となった女や小姑が居て、嫁つせ子にとって気の休まる時がなかった。しかし、つせ子が「すべてを胸一つに<sup>おさ</sup>蔵め」（95 頁）たので波風がたたず、小楠は「おつせは君子」（94 頁）と称嘆、女たちも一目置いた。実際はつせ子にとって、ひたすら忍従の生涯だったといえる。

六女かつ子（後、楫子）は、郷士林七郎に嫁ぐ。兄直方と小楠の見立てではあったが、林はすでに 2 度結婚し離婚、先妻の子供がいた。その上、大酒のみでかつ子に暴力をふる

った。夫の横暴に耐えかね、結局離婚。順子たちの私塾を手伝ったりしていたが、東京在住であった兄直方の看病を理由に上京。この時、「楫のように大きな船を動かすことが出来るかもしれない」という思いを込め、心機一転楫子と改名した。その後、教員講習所で学び、小学校の教師から女子学院の院長、基督教婦人矯風会初代会頭に就任と目覚ましい活躍を遂げていった。その活躍を世間は「新しい女の先駆」「社会的婦人の第一人者」と評した。しかし、蘆花から見れば、「世間でわいわい囃す『強い女』に止らず、もつともつと謙虚な、たつぷりした深みのある女になつてもらひたかつた。畢竟女に、母に、なつてもらひたかつた。」（「矢島叔母の絶筆について」（注④））と記している。

七女さだ子は、両親が40歳を過ぎてから誕生した末っ子で姉たちよりも甘やかされて育った。小楠門下の河瀬典次のもとに嫁ぐ。

姉妹について、順子の生涯と関わらせておりおり紹介しているが、中でも順子と同じように「心の母」と思う横井つせ子には、蘆花が同志社時代横井家に居候をしていたこともあって、大変恩義を感じている。また横井家の姑・小姑らとの生活の苦労を間近に見ていたので、その書き方には、愛情が垣間見られるものになっている。

一方、かつ子（楫子）には、夫に恵まれなかった不幸はあるが、我が子を里子にしたことやその事実を隠していることが、その後子供たちに不幸な結婚生活を送らせたと、叔母の態度を批判（「二つの秘密を残して死んだ叔母の霊前に捧ぐ」（注④））した。また『新春』出版後夫妻でかつ子のもとを訪ね、「公私一切が神人の前に分明で」なければいけないと懺悔を迫った事実（注④）もある。自ずと厳しい目で書いている。

順子が上京し、楫子の「女子学院」を見て、「わが故郷に残し置いた田舎女学を順子は恥かしいものには思ひ浮かべ」ない（260頁）などの記載は、順子が本当にそう感じたかどうか

か。むしろこれなどは、楫子に対する蘆花自身の思いが、順子の口を通して言わせたと思像される。

#### 4、理想の女性像とみる順子の生き方

蘆花が順子を理想の母、女性とみるのは、どのような点がそういわせたのだろうか。

##### （1）従順・貞節

「順子のやうにすべてに順ひ、すべてを愛し、而してすべてを生かす女」（38頁）は律次郎だけでなく、「世界に良人となし得ぬ男子は一人もなかつたであります」（同）と述べ、女性として従順に夫に従う貞節な妻、いかに素晴らしいかを力説している。

また、かつ子（楫子）も順子の結婚生活を見て、これまで自分の人生の中で一番感心した女性は姉順子であるとし、「失敗の度毎に、夫を慰め励まし、倍旧の努力を奮つて、一層猛進させた所は、確かに婦人の亀鑑とすべき」（55頁）だと思つたと述懐している。

##### （2）慈愛

順子のもとで働く使用人たちは、「必ず何か人知らぬ長所を見出され、不思議な程有益な働き人となつて、心から喜んで其分を盡し」（105頁）た。そして男たちには独立させ、女には良縁を探し、「当人は固より、其の土地の幸福となることは」（同）すべてした。そしてここで生まれた子供たち、特に娘たちには順子は、家事をしながら読み書き以外に裁縫も教えた。どのような子供にも「自然に湧き出づる慈愛」（106頁）の心で接した。

##### （3）清潔

女学校での屑を拾うことを日課としたことは、「気丈で清潔で、心清らかに身だしなみもちやんとして居るが好きの順子は、周囲を汚なくして措く忍び」（284頁）なかったからである。

##### （4）謙虚

信仰の世界に入ってから、それまでキリスト教を否定して勧めてくれた人々に大変失礼をしたと「謝罪」を忘れなかった。ゼエンス

にも手紙で先非を悔い、甥や姪などにも「顔さへ見れば鄭重に昨非を詫び」（210 頁）た。

## 5、蘆花の描きたかったこと

蘆花は、『竹崎順子』出版の際の広告文に、「永劫の火の国肥後」で選ばれた「女」の家があり、それが「矢島家」である。「主婦鶴子は百年前の新しい女」。鶴子から生まれた 7 人の女は鶴子の「七変化」。その中で「堅実な父と潑刺とした母」を調和させた体現が順子であるといい、「日本が識らず愛せずわがものとせず」に措いておくには、「あまりに惜しい永劫の女」だ。是非、新しい日本の新しい女として、復活させたい」と（全集第 19 巻収 534 頁）と書いた。竹崎順子の生涯を是非とも世間に知らせたいという強い思いが感じられる。

順子は結婚後、婚家の没落、夫の不遇などにもめげず、従順な、しかし強い女として生きた。夫の死後、孫の死や不正、女学校の苦難の時も、神を信じ祈ることをやめなかった。

蘆花は『新春』で、イエスと同様に自らが「Scape Goat」となって人々を救い、そのことで神の栄光・福音を人々に伝える役目を果たそうとする決意を語った。

「夫婦の大倫を第一義に」（508 頁）「家」（同）を大切に「周囲を責むるよりも先づわれを推して周囲に及ぼし」（同）「一年又一年と尋当に公明に正大に堅固に生涯を築い」（同）た竹崎順子。世に逆らうことなく従順に自分の生涯を生き抜いた無名の一女性。この一女性を日本中に知らしめたいという思いが、強かった。たとえ伯母の願いがなかったとしても、伝記としてまとめたのではないか。

そこまでいえるのは、楫子の存在である。前述したように、蘆花夫妻が懺悔を強いた叔母楫子は、『竹崎順子』発表時、矢嶋姉妹の中で唯一存命であった（注④）。楫子は、女子学院院長、基督教矯風会初代会頭の地位にまで昇りつめ、海外の平和会議などにも出席して「日本の女の力」（557 頁）を示した。病

気危篤の際には「皇后陛下の御尋ね」（同）があったそうで、まさに「社会的名誉の絶頂に立」（同）った女性である。だが、この叔母楫子は「自我」の強さがあったから、成功したともいえる。

それに対し、順子は、与えられたことに逆らうことなく従順に成す女性だった。しかし、従順でありながら、熊本女学校校長としての仕事を成した。熊本の近代女性では、やはり卓越した女性であったことはいうまでもない。この生涯を世に知らせることが、『新春』以後「神の福音を伝えていくような仕事」の一つに値したと考えていいだろう。

さらにいえば熊本の近代史、女性史の観点からも、この作品の価値は大きいといえよう。

（本稿は、平成 23 年 8 月 23 日解釈学会全国大会口頭発表と、平成 24 年 9 月 18 日熊本徳富記念園での講演とをもとにしている。

また、本稿の引用に際し、旧漢字は新字に改めている。）

## 注

- ① 今回使用している蘆花作品の引用は、すべて昭和 3～5 年刊行の新潮社版蘆花全集を使用。
- ② 拙稿「徳富蘆花『新春』、新しい出発」（平成 23 年 1 月「解釈」解釈学会）
- ③ 順礼紀行から帰った翌年の明治 40 年 2 月から亡くなるまで住むことになった世田谷粕谷の家。現在の東京都世田谷区粕谷 1 丁目 20-1 蘆花恒春園。トルストイの影響で晴耕雨読の生活の実践。随筆集『みみずのたはこと』は村人との交流を描く。拙稿「徳富蘆花『みみずのたはこと』」（平 18・3「成蹊人文研究」第 14 号 成蹊大学大学院文学研究科）
- ④ 拙稿「徳富蘆花『順礼紀行』について」（平 15・3「成蹊人文研究」第 11 号 成蹊大学大学院文学研究科）
- ⑤ 「50 年の重荷を卸して、唯今桃の中から

躍り出た桃太郎になりました。否、アダムになりました。赤裸の自由さ、快活さ、瑞々しさに唯踊り踊りたい程嬉しくて堪らぬ」(全10『新春』368頁)。蘆花夫妻が鬱屈した思いから解き放たれ、神の栄光を伝える役目を果たそうと決意し、表明した作品。

- ⑥ 妻愛子と同母ですぐ上の兄。蘆花の兄猪一郎とも早くから親しく、蘆花と愛子の結婚の際、両方の兄が積極的に動いた。明治36年頃から朝鮮郡山で種苗供給の農園を経営していた。蘆花より1歳年下。
- ⑦ 拙稿「『死の蔭に』について」(平21・6・17 熊本日日新聞社日日新書『至宝の徳富蘆花』熊本県立大学編所収。109～158頁)
- ⑧ 学校名変遷は次の通り。明20・5: 熊本女学会～明21・9: 熊本英学校付属女学校～明22・11: 熊本女学校～大10・3: 大江高等女学校～昭23・4: 大江女子高等学校～昭28・4 大江高等学校～昭63・5: フェイス女学院高等学校～平17・4: 熊本フェイス学院高等学校。平19創立120周年を迎えた。しかし平21開新学園と合併し、平23・3月廃校。歴史を閉じた。
- ⑨ 大11・2・7「大江高等女学校に於ける講演」(全19「偶感偶想」57頁～75頁、口絵に講演をしている蘆花と聴衆の写真を掲載)
- ⑩ 拙稿「徳富蘆花『黒潮』」(平14・3「成蹊人文研究」第10号 成蹊大学大学院文学研究科)
- ⑪ 姉山川常子が大江の河田光子のもとにきていたので、迎えがきた(全18『富士』(266頁))
- ⑫ 拙稿「『自然と人生』の『風景画家コロオ』について」(平10・3「成蹊人文研究」第6号 成蹊大学大学院文学研究科)
- ⑬ ②同じ
- ⑭ 中野好夫著『蘆花徳富健次郎』第3部 筑摩書房 昭49・9・7 331～340頁

- ⑮ 前田河廣一郎著 興風館 昭22・11・20 節は「伯母の臨終」(437～446頁)「竹崎順子」(619～626頁)をたて、中野氏のいう2頁より多く言及。
- ⑯ 前田河廣一郎著 興風館 昭18・11・20 1行とは561頁6行目。
- ⑰ 拙稿「徳富蘆花『黒い眼と茶色の目』の成立と内在的意味」(平19・8「解釈」解釈学会)
- ⑱ 「杉堂、矢嶋旧宅」「短冊2葉…順子の父・母」「布田掘立小屋の跡」「横嶋全景、竹崎屋敷跡及付近」「独鈷山と白木原、及び竹崎屋敷」「矢嶋家兄姉妹の写真」「竹崎茶道筆蹟」「熊本女学校講堂、校門、校舎」「日々ひかへく順子筆蹟」「記念館及其内部」「日記より(写真)」「終焉室と其家」「葬儀」「茶堂墓、順子墓」
- ⑲ 蘆花の誕生日も同じ10月25日(中野好夫氏『蘆花徳富健次郎』第1部拾遺2「蘆花の生年月日」によれば諸説あるようだ)。
- ⑳ 姉にはこは双子の長女。当時母の生家三村家の嗣子伝之助(後、伝)の妻。
- ㉑ 1町10反99,2 $\frac{1}{2}$ 。1 $\frac{1}{2}$  100 $\frac{1}{2}$ 、30,25坪。
- ㉒ 「肥後藩が、緒方、北里、田代、弘田、浜田の諸医博士を出して、日本の医界に貢献した」のもこの医学校によると思われる」(『竹崎順子』125頁)
- ㉓ 熊本県立大学編著『ジェーンズが遺したもの』熊本日日新聞社日日新書 平24・3・14)
- ㉔ ゼエンスは英語教師以外にも、熊本の地に殖産興業の新風を吹き込んだ。養蚕、乳業、落花生やトウモロコシ栽培。西洋鋤を使用させ、果樹栽培にも熱心だった。ゼエンスの妻も料理裁縫などの家庭的知識を教えた。
- ㉕ 「師小楠の所謂「器用過ぎる」竹崎と「綿密過ぎる」徳富と、性格の相違は意見の齟齬、感情の岐れ目」(『竹崎順子』127頁)

- ②⑥ 熊本出身の木下順二の戯曲「風浪」(昭28・2未来社刊)は、この頃の竹崎茶堂をモデルにしているといわれている。
- ②⑦ 「農業三時を著わした其頃のハイカラ農の津田仙(津田梅子の父)とは話がよく合いました」(138頁)
- ②⑧ 楫子は当時東京芝の桜川小学校(現在の港区御成門小学校)に奉職していた。
- ②⑨ ゼエンスの父はゼンエス同様軍人で、かつ熱心なキリスト教信者。プレスビテリアン教会の長老。
- ③⑩ 誓約を交わした35人は熊本バンドと呼ばれる。ほとんどが同志社に学び、牧師、教職、官公吏、政治家となり、活躍した。
- ③⑪ 明治政府に対し士族による熊本市内での反乱。多数の死者。敬新党の乱ともいう。
- ③⑫ 全10『黒い眼と茶色の目』では「叔母さん」として登場。実名や仮名なし。中風になるこの場面は『黒い眼と茶色の目』70～76頁に詳しい。なお、叔母の病気で親戚が寝泊まりすることがきっかけに、蘆花と山本久栄が親しくなった。
- ③⑬ 同『黒い眼と茶色の目』の「次平」として登場。土平が蘆花と久栄の間を動き回り二人の恋愛をこじらせた。破綻の原因の一つともいえる。
- ③⑭ 順子が44歳の明20(1877)・10、熊本の女学校の教室でもあった草葉町講義所で、娘節子と共に受洗。
- ③⑮ 矢嶋姉妹の受洗年は次の順番であった。6女楫子が14年(築地新栄教会でデビッド・タムソンから)、5女つせ子が15年(今治教会で横井時雄から)、4女久子が17年(熊本下記蘆花と同じ)。蘆花は18年、姉らと熊本三年坂のメソジスト講義所で飛鳥牧師から洗礼を受ける。
- ③⑯ 横井時雄の妹みや子と結婚。明40・4・14本郷教会(現弓町本郷教会)牧師として蘆花の父一敬(86歳)に洗礼を受けた。
- ③⑰ 一敬の4番目の弟、徳永昌龍の長男。横浜でアメリカの宣教師バラに学び、受洗。
- 帰郷後、叔父一敬の共立学舎、従弟猪一郎の大江義塾なども手伝う。熊本新聞社主筆。著書『逆境の恩寵』。
- ③⑱ 久子は、母鶴子が「新しい婦人として当時の不満と将来の希望を抱いていた」ことを覚えていた。久子自身も「己が境遇と閱歴から婦人の位置について大方ならぬ不満を抱き、婦人の位置を向上さす必要と、それには女子教育の必要を早くから感じて」いた(213頁)。しかし、久子一家は女学会が動き出す前に、東京に移住することになったので、久子は創案者としてのみ名を残した。
- ③⑲ 日本組合基督教会牧師。明39・3・31安中教会牧師として、蘆花の妻愛子に洗礼を授ける。
- ④⑩ イギリスに留学中、熊本英学校から招聘を受け帰国。女学校長も兼務。英学校に着任時、迎えた奥村禎次郎がキリスト教博愛主義の演説をし、その内容を巡って解雇を迫る県の弾圧を受けた。学内も二分される。この奥村事件を経て着任4年、女学校も改革をしようとする蔵原にとって、竹崎順子が目障りだったことが背景にある。
- ④⑪ 蘆花の英学校での教え子。医師。教育者。
- ④⑫ ⑦に同じ。
- ④⑬ 全19「偶感偶想」所収。初出は大14「婦人公論」8月号。
- ④⑭ 全19「偶感偶想」所収。初出は大14「婦人公論」8月号とあるが、この掲載発表雑誌について、中野好夫『蘆花徳富健次郎』第一部 附録蘆花探訪拾遺1「矢嶋楫子の告白について」で、「婦人の国」の間違いであると指摘。
- ④⑮ ④⑭に同じ。
- ④⑯ 大14(1925)・6・16、92歳没。